



FESTIVAL / TOKYO

フェスティバル / トーキョー 19 主催プログラム  
教育普及プログラム



# DIALOGUE NEXT DOCUMENT

ダイアログ・ネクスト ドキュメント



# INTRODUCTION

フェスティバル/トーキョー（以下 F/T）19 では、教育普及プログラムとして F/T18 から引き続き学生を対象にした観劇ワークショッププログラム「ダイアログ・ネクスト」を開催しました。

教育普及プログラムを通して、F/T は観劇の経験を深め、広げるような企画を提案しています。本書で紹介する「ダイアログ・ネクスト」は、学生を対象にしたプログラムです。アーティストや参加者同士の深い対話のなかで、異なる価値観や文化をもつ他者に出会い、自分を見つめなおすことを目的としています。

本書では、全 8 回のプログラム内容についての記録と、講師からの寄稿、参加者からのレポートをご紹介します。

# CONTENTS

- 01 事業概要
- 02 全体監修：中尾根美沙子 寄稿
- 04 プログラム詳細
- 15 参加者レポート



## ABOUT

### 舞台芸術を通して、「他者に出会う」1ヶ月

F/Tのプログラムを鑑賞し、仲間との感想を共有。海外アーティストとの対話やワークショップを通して、多様な価値観に出会い考えを深める、1ヶ月にわたるプログラムです。



#### 事業概要

日程	2019年10月12日[土]～11月17日[日] ※10月12日は台風により中止
会場	フェスティバル実施会場内各所、F/T 椎名町オフィス
全体監修	中尾根美沙子
ファシリテーター	斎藤美雪、小田川悠、石川清隆、望月玲奈
ワークショップ講師	多田淳之介(東京デスロック / APAF-アジア舞台芸術人材育成部門2019 ディレクター)
ゲスト	キム・ジョン、ウンラー・パーウドム、ヌーナファ・ソイダラ、バソムシン・ボムマヴォン、シリバンオン・ヴォンサ、ソムワンペン・ケオルアンラート、オクイ・ララ、滝 朝子、JK・アニコチェ、ネス・ロケ、マグダ・シュベフト、ウカッシュ・ヴォイティスコ、滝口 健、曾根千智
参加費	8,000円 ※鑑賞演目のチケット代を含む。※交通費、食費、宿泊代は含まない。
参加者総数	9人
参加大学	近畿大学文芸学部/慶應義塾大学総合政策学部/慶應義塾大学文学部/女子美術大学アートデザイン学科/東京藝術大学美術学部/東洋大学社会学部/日本大学芸術学部/早稲田大学法学部



ダイアログ・ネクストがスタートするおよそ2ヶ月前、広報用としてこんな文章を書いた。「素敵な作品に出会うと、心が動き、言葉が溢れてきます。刺激的な作品に触れると、頭が動き、もやもやした気持ちが生れます。そんな自分の内側の感情を、共通体験をした仲間と共有していきます。共有により、考えが整理されたりまた広がったり……。自分の視点と他者の視点が交わる、素敵な時間をぜひ作っていきましょう。」

ダイアログ・ネクストが終わっておよそ1ヶ月。今振り返ってみると、この時イメージしていた場を実際経験した感覚と、その想像をはるかに超えた場を体感した感覚の両方が、私の中に残っている。

想像をはるかに超えていた点のひとつとして、鑑賞したアートの幅の広さがある。全8回のプログラムの中の4回の鑑賞ではどれも刺激的で、演劇だけではなく、コンテンポラリーダンスもあれば、レクチャーパフォーマンスもある。一言でアートといってもここまで違うということに、正直初めは戸惑い驚いた。しかしそれ以上に、ダイアログ・ネクストの参加者たちがそんな違いは全く気にもとめず、どんなアートもまっすぐ受け止め、何かをわかろうと前向きに対話してくれたことは、私にとって想定外ではあるが嬉しい驚きであった。

前向きな対話に向かっていききっかけは、こちらが用意した枠を参加者がはみ出していくといった小さな出来事だったと思う。アーティストの対話に入る前のミニワークの時間。ここでは、数回、色を使って自分の気持ちを言葉にする「折り紙ワーク」を実施した。作品鑑賞の直後の、参加者の言葉にしきれない感情を、一旦色に当てはめてみることで、少しずつ言葉が生まれ、色を語ることをきっかけとして対話が進んでいくことを狙ったものだった。初めて折り紙ワークをやった回は、参加者それぞれが1色を選び、まだ話し慣れない中で、自分の感情を色に当てはめながら言葉を生み出している様子が見られた。

面白くなってきたのが、折り紙ワークを始めてから2回目の時である。ある参加者が「2色の対照的な色が自分の中にある」と2色を選び語り始めた。またある参加者が、白を選び、「色に当てはめられない感情がある」と語り出した。こちらの準備した枠から参加者が主体的にはみ出していく、そんな嬉しい状況が起こったその時を、今でも鮮明に覚えている。

枠にはまることなく自分の意見をまっすぐに伝えてくれた彼女たちの存在は、その後も参加者たちの中で常に影響を与え続けていった。少人数での開催となった今回のダイアログ・ネクストでは、参加者コミュニティにおいて一人一人の存在価値が非常に高い。だからこそ、このような一人の思い切った行動や発言が場に刺激を与え、全体が少しずつ成熟していく様子が何度か

---

---

見られ、そのことが「他者を通して自分を理解していくこと」につながっていったように感じる。

劇作家の平田オリザ氏は、対話とは「他者との異なった価値観の摺り合わせ」であり、そしてその摺り合わせの過程で、自分の当初の価値観が変わっていくことを潔しとすること、あるいはさらにその変化を喜びにさえ感じる対話における基本的な態度である言っている。

このことを踏まえた上で考えてみても、参加者同士の「対話」が確かに積み重ねられていた。作品鑑賞の後に、異なった価値観をぶつけ合い、お互いに問いかけあい、誰かの言葉に触発されて、自分の考えが変化しはじめるといった「対話」が生まれていた。そして対話の中で生まれた気づきは、作品への理解を超えた「私への理解」へと繋がっていたように感じる。

対話の場を生み出した要因はいくつもあるものの、F/T事務局により練られた複数回にわたるプログラム構成と、対話の前後に数回のワークショップを挟んでいることが非常に大きかったと感じる。演劇ワークショップを含む、濃い共通体験の中で築かれた参加者間の信頼関係とお互いへのリスペクトが、対話空間を作り出す源になっていたことは間違いない。

一方、課題として感じることは、アーティストを含む対話の場面である。毎回1時間30分で設定されたアーティストを含む対話の場は、本当の対話になる一歩手前で、常に時間切れになってしまったような残念な気持ちが残る。多くの制約がある中で、理想と現実のバランスをとっていくことは必要であるものの、対話の前提条件ともなる安心安全でフラットな場を作り出すための、アーティストと参加者の関係性づくりの時間が必要だったように感じる。

何者でもない狭間の時期に「わからなさ」と向き合ったこの1ヶ月は、彼女たちにとってとても贅沢な時間だったと私は思う。わからないことを時間をかけて語り合ったこの経験は、彼女たちの何かを変えたというような、わかりやすい経験ではないだろう。しかしながら、はっきりは見えないけれど確実に、彼女たちの中に溜まっていく「何か」がうっすら見えた気がした。

---

### 中尾根美沙子

青山学院大学社会情報学部プロジェクト准教授 / ワークショップデザイナー育成プログラム プロデューサー・講師。2008年より、ワークショップデザイナー育成プログラムの立ち上げに携わり、プロデューサーとしてカリキュラム設計、eラーニング制作を行っているかたわら、ワークショップ、インスタラクショナルデザインの研究に携わる。著書には、「ワークショップと学び」2,3巻（共著）など。





# PROGRAM

0

## キックオフミーティング ※台風により中止

日程 10月12日(土) 14:30-17:00  
会場 F/T 椎名町オフィス  
ゲスト 長島 確(F/T19ディレクター)

1

## 演劇体験ワークショップ

日程 10月19日(土) 15:00-20:00  
会場 F/T 椎名町オフィス  
ゲスト 多田淳之介

2

## 『ファーム』観劇 キム・ジョンとの対話

日程 10月20日(日) 12:30-19:00  
会場 あうるすぽっと(豊島区立舞台芸術交流センター)  
TKP 池袋カンファレンスセンター 5B会議室  
ゲスト キム・ジョン

3

## バンブー・トーク プニン 『Bamboo Talk』『PhuYing』観劇 ファンラオ・ダンスカンパニーとの対話

日程 10月26日(土) 13:30-19:00  
会場 東京芸術劇場 シアターイースト  
レンタルスペース24(豊島区南池袋)  
ゲスト ウンラー・パーウドム、ヌーナファ・ソイダラ、  
パソムシン・ボムマヴォン、シリバンオン・ヴォンサ、  
ソムワンペン・ケオルアンラート

4

## JK・アニコチェによるワークショップ

日程 10月31日(木) 18:00-21:00  
会場 F/T 椎名町オフィス  
ゲスト JK・アニコチェ  
アシスタント ネス・ロケ

5

## トゥ・トゥ・トゥ 『To ツー 通』観劇 オクイ・ララ、滝 朝子との対話

日程 11月2日(土) 14:30-19:00  
会場 シアターグリーン BIG TREE THEATER  
ゲスト オクイ・ララ、滝 朝子

6

## 『オールウェイズ・カミングホーム』観劇 クリエイティブチームとの対話

日程 11月10日(日) 12:30-18:30  
会場 東京芸術劇場 シアターイースト  
レンタルスペース24(豊島区南池袋)  
ゲスト マグダ・シュベフト、ウカッシュ・ヴォイティスコ、  
滝口 健、曾根千智

7

## 共有会に向けたグループワーク

日程 11月16日(土) 13:00-16:00  
会場 F/T 椎名町オフィス

8

## 共有会

日程 11月17日(日) 10:00-17:00  
会場 F/T 椎名町オフィス  
ゲスト 長島 確、昨年のダイアログ・ネクスト参加者

## 1 > 演劇体験ワークショップ

会場 —— F/T 椎名町オフィス

ゲスト —— 多田淳之介(東京デスロック/APAF -アジア舞台芸術人材育成部門2019 ディレクター)

### 15:00 インTRODククション

F/Tスタッフから、本プログラムの主旨を説明。それぞれの緊張した顔がうかがえる。

### 15:10 アイSPレイク

<4分割自己紹介>

4つの質問が書かれたシートを記入し、シートをもとに1分ずつ自己紹介を行った。このシートは全員分印刷し、ワーク終了後に配布した。

### 15:50 ワークシヨップ

多田淳之介さん主導でのワークショップを開始。前半の体と頭をほぐすワークの後、後半は詩や短い戯曲を使った演劇的な活動を行った。最初は緊張した面持ちだった参加者たちが、演劇的な手法をとおして徐々に打ち解けていく様子が見られた。

■前半のワーク

<ネームチェーン>

名前を呼びあうゲーム。最初は名前だけ、徐々に指パッチンやスカーフ投げなどの動きが追加されていく。

<うごきしりとり>

しりとりをしながら言葉に動きをつけていくゲーム。ほかの参加者の動きを真似するなかで徐々に体をほぐした。

<振付ゲーム>

指示する人以外は目を閉じて、言葉の指示のみで体を動かしていく。言葉による指示の受け取り方は個人によって大きく変わることを実感していく様子が見られた。

■後半のワーク

<詩を読む>

配られたテキストから、自分の好きなものを選び読んでみる。徐々に場所や体の状態を変えて「演出」を加えてみる。表現の変化による味わいの違いを観察していった。

<短い戯曲を作り、上演してみる>

3人グループに分かれ、雑談を行う。その内容をセリフとして文字におこし、戯曲にしてみる。戯曲をもとに雑談を再現したり、場所や体の状態を変えて演出を加えてみたりと、上演までの過程を体験した。グループごとに創作した短い演劇を上演しあい、表現の違いを楽しんだ。

### 19:30 感想シェア&次回にむけて





## 2 > 『ファーム』観劇 キム・ジョンとの対話

会場 ————— あうるすぽっと(豊島区立舞台芸術交流センター)

TKP 池袋カンファレンスセンター 5B 会議室

ゲスト ————— キム・ジョン(演出)

APAF-アジア舞台芸術人材育成部門 Young Farmers Salonとの合同開催

【作品について】 松井周の戯曲『ファーム』を、韓国演劇の新世代演出家として注目を集めるキム・ジョン演出で上演した。近親者による遺伝子操作や体内での臓器培養など、タブーを逸脱しながら人間の本質を露わにしていく松井独自の世界観が十分に発揮された戯曲が、キムの解釈によって、新たな側面を見出された。

12:30 あうるすぽっと ロビー集合

13:00 観劇

15:00 終演



「ファーム」公演の様子 Photo: Alloposidae

移動、休憩

15:35 発散リフレクション

折り紙の中から自分の好きな色をひとつ選び、その理由を発表。また、『ファーム』を観劇した感情を表す色をそれぞれ選び、その理由を2-3人のグループで共有し合った。共有はメンバーを変えて2回行った。

16:35 キム・ジョンとの対話

APAFのYoung Farmers Salonのメンバーを交えて対話を行った。

参加者が選んだ色を見たキムさんは「衣装や舞台セットはカラフルなのに、みなさんが選んだ色はモノクロもあるのが興味深い。なぜか教えて！」と質問。「最初は戸惑っていたのに後半は引き込まれていた。それがなぜかわからなかったもやもやをこの色で示した。」「神とか信仰というものを感じた。あたたかい神のイメージで白にしました。」など自分の考えを発表した。キムさんは「自分が最終的に目指したいのは、モノクロの表現。夢のような舞台の時間と、日常の孤独というような相反するものを端的に提示したい」と応えた。気になった表現や舞台機構についての踏み込んだ質問や、日韓の表現の違いについての考えを交換したりと、あっという間の時間となった。

18:30 収束リフレクション

1日を通して得た自分の考えを構造化するため、キーワードを選び、「語れる三角」を個々に作成した。

その後、設定された4-5人のホームグループ内でそれぞれの語れる三角を発表。また、グループのメンバーの語れる三角に対しては、付箋にコメントを記入して言葉でフィードバックをした。



10.26 Sat. | 13:30-19:00



バンブー・トーク  
ブニン

# 『Bamboo Talk』『PhuYing』観劇 ファンラオ・ダンスカンパニーとの対話

会場 ————— 東京芸術劇場 シアターイースト / レンタルスペース24 (豊島区南池袋)

ゲスト ————— ウンラー・パーウドム、ヌーナファ・ソイダラ(振付・出演)、パソムシン・ポムマヴォン、シリバンオン・ヴォンサ、ソムワンペン・ケオルアンラート(出演)

【作品について】 伝統舞踊とヒップホップのテクニックを共存させたクリエイションのみならず、ワークショップの開催やフェスティバルの主催などを通じ、ラオスのダンス・シーンを牽引するファンラオ・ダンスカンパニー。初めての来日公演となった今回は、ラオス南部の文化を伝える男性デュエット作『Bamboo Talk (バンブー・トーク)』と、女性ダンサー3名が現代ラオス女性のリアルを伝える『PhuYing (ブニン)』の2作品を紹介した。

13:30 東京芸術劇場 ロビー集合

14:00 観劇

15:00 終演

移動、休憩



15:30 発散リフレクション

前回同様、観劇後の自分の感想に近いものを色で選ぶ「折り紙ワーク」を行った。その色を選んだ理由、感想やキーワードを考え、発表。前回から発展して、2色を選ぶ人や、色で補えない部分を言語化する人など、ワークを応用して、意見を述べる様子が見られた。

16:00 対話のタネをつくる

各グループで「作品にサブタイトルをつけるなら？」というテーマで、話し合う。作品から感じ取ったものが一人一人大きく違うことが分かり、興味深く互いの意見を聞きあっていた。

16:30 アーティストとの対話

参加者が考えたサブタイトルを、アーティストに向けて発表するところから対話がスタートした。『Bamboo Talk』は「変化とともに生きる人」というサブタイトルが発表された。「変化に対して抗おう、戦おうとしている姿」を感じ取ったと説明した参加者に対し、ウンラーさんは、「抵抗というより、変化しているその日常の状況を自分の言葉で語っている」と説明。参加者が戦いだと捉えたシーンは、お祭りを表していることがわかり驚きの声があがった。参加者の一人は「ラオスの人が見たら明るいシーンに見えるのかもしれない。共通の身体言語としてお祭りの動きを知っているから」と語り、自分が作品を見る視点に、文化的な背景が影響していることに気づいた。また、『PhuYing』については「命」というサブタイトルがついた。女性の生き方、妊娠、新たな命の誕生というキーワードを感じとったためである。生理痛の大変さを表したシーンでは、共感の声が多く上がった。女性の家庭内や社会での立場について、ラオスと日本の違いを語りあったりと、作品を切り口に「生き方」に触れる時間となった。

18:10 収束リフレクション

〈今日の感じたことを粘土で形作る〉

粘土に込めた思いや、今日の振り返りをグループ内で発表。その後、違うグループの粘土を互いに見ながら、意見交換を行った。粘土を使い表現することで、言語化しづらい自分の中の感情の変化にも気づくことができる時間となった。

## 4 > JK・アニコチェによる演劇ワークショップ

会場——— F/T 椎名町オフィス

ゲスト——— JK・アニコチェ      アシスタント——— ネス・ロケ

### 18:00 チェック・イン

ひとりひとりが声をあげて気持ちを伝えることで、「存在を空間に入れる」という考え方がアニコチェさんより共有された。

### 18:30 身体を使ったワーク

<歩き回るワーク> 部屋を歩き回りながら「自分にとって安全な場所」「安全ではない場所」を探すワークを行った。  
<エンパシーウォーク> 二人組になって、相手を観察しながら歩き方を真似してみるワーク。体だけでなく、「目線、気持ちも真似してみて！」という声がかかる。

### 19:00 感想の共有

体を使ったワークの中での感想を共有した。「彼女は腕を振って歩くけど、わたしは振らない。そんな小さな差で使う筋肉が全然違うのが面白い」「彼女は姿勢がいいから、真似してみたら心臓が楽になるような新しい感覚があった」「自分がいつも下をむいて歩いていることに気づいた」「ジャッジされている感覚ではなく、理解しようとしてみってくれる感覚が心地よかった」などの感想があがった。

### 19:15 感情を共有するワーク

2人組になり、言葉を使わず空間にあるものを使って感情を共有するワーク。

クッションを投げたり、電気をつけたりけしたり、毛布にくるまったり… お互いに発する感情を真似したり観察したりすることで感情を共有することを試みた。

### 19:30 お互いの表現を発表

### 20:00 チェック・アウト

アニコチェさんのパフォーマンスへの考え方が共有され、質疑応答が行われた。

彼にとって、パフォーマンスとは問題や意識をシェアする場であり、社会的役割「Social Function」を持つものである。反応を生み出し、何らかの行動「redirection」を引き出すものでなくてはいけない、というお話があった。「シェア」という一貫したワークショップのテーマに気づいた参加者たちは、アニコチェさんの思いをしっかりと受け止めていた。

### 20:50 次回にむけて



11.2 Sat. | 14:30-19:00

# 5 > 『To ツー 通』 観劇 オクイ・ララ、滝 朝子との対話

会場 シアターグリーン BIG TREE THEATER

ゲスト オクイ・ララ、滝 朝子(企画・出演)

【作品について】 移民や移動、アイデンティティをめぐる事象に着目した創作を続けてきたマレーシア出身のオクイ・ララと、多文化コミュニティにおける制作と作品発表を通して、人と表現の変化を探る滝朝子の2人が、強い関わりを持つコミュニティについてのリサーチを重ね行ったレクチャー・パフォーマンス。

14:30 シアターグリーン ロビー集合

15:00 観劇

16:15 終演



「To ツー 通」公演の様子 Photo: Alloposidae

16:45 発散リフレクション

対話の「芽」を探る「ボーダーってなんだろう？」

先週与えられていた宿題をもとに、今回のパフォーマンスで感じたこと、疑問、共有したいことなどを付箋に書いて模造紙に貼りだした。「ボーダーはマイナスなイメージだが、自分を守るためのものでもある」「ボーダーを無くすことは正解なのか」など、ボーダーそのものについて共有しながら見つめ直した。

17:15 オクイ・ララ、滝 朝子との対話

レクチャーについて、感想の共有から対話がスタート。「意見を押し付けられるのではなく、ライトに見ることができ驚いた」「匂いや音楽など五感を刺激され、身近に感じることができた」という感想があがった。滝さんはそれを受け「移民をテーマにした他の作品を見ると、その深刻さをとらえようとするあまり、問題を誇張しすぎて差別を再生産しているのではないかと感じることもある。私は、主語の大きな『社会問題』ではなく、『自分』の経験や考えをシェアするように努めている。」と語った。自分でも作品作りをしている参加者の一人が、「社会的なテーマを扱う時、当事者や専門家でもないのに、そのことを語れるのかというハードルを感じている」と話すと、オクイさんは「あなたがその問題について知っていく過程が、ほかの人にとってボーダーを超えるための道しるべになる。過程を見せることに意味のあるんじゃないか」とアドバイスした。

18:50 収束リフレクション

2人との対話を通じて、もう一度「ボーダーとは何か？」という問いに対しての意見を共有した。一貫した問を持ち続けた対話によって、演目を鑑賞する前と後、アーティストと話す前と後で、考え方が変化したことを実感する時間となった。





## 🎵 『オールウェイズ・カミングホーム』観劇 クリエイティブチームとの対話

会場 ————— 東京芸術劇場 シアターイースト

レンタルスペース24（豊島区南池袋）

ゲスト ————— マグダ・シュベフト(演出)、ウカッシュ・ヴォイティスコ(テキスト&ドラマトゥルク)、滝口 健(ドラマトゥルク)、  
曾根千智(アシスタント・ドラマトゥルク)

【作品について】 現代ポーランド演劇の前線を切り拓く若手演出家、マグダ・シュベフトが日本・ポーランド両国のスタッフ、キャストと共に作り上げた新作。遠い未来にあって、科学技術とは距離を置き、自然との精神的な絆を保ち続ける人類の末裔の文化を独自の「民族的資料」として発表したアーシュラ・K・ル＝グウィン『オールウェイズ・カミングホーム』が原案となっている。

12:30 東京芸術劇場 ロビーに集合

13:00 観劇

14:40 終演

移動・休憩



15:00 発散リフレクション

2グループに分かれ、テーマを設定せず、感じたこと、思ったことをグループにて共有する。

模造紙に書き込みながら共有をすすめる。わからなかった部分に対してお互いに考えを教えあったり、舞台セットの意味や衣装の意味を考えたり、ゆっくりと作品をかみ砕いていく作業を行った。

16:00 クリエイティブチームとの対話

感想を共有するところから対話がスタートした。衣装や美術の中のシンボルやメタファーについてや、創作過程への質問が活発に飛び交った。「一番話し合いを重ねた場面はどこか」という質問に、「1年以上長い期間をかけたので一番は決められないが、本の中でどの部分を切り取るのかについては多く話し合った」と答えた。対話の中でも、ドラマトゥルクや演出から作品に対しての違った解釈が飛び出し、意見の違いを認め合いながら作品作りが行われてきた過程がうかがえた。

17:30 収束リフレクション

各自、感じたことや考えたことをレゴブロックで表現し、発表しあった。粘土と比べ、色や形、表情といった要素が加わるレゴブロックでは、より複雑な感情を表現する参加者が目立った。今回が参加が最後になってしまうメンバーから、ほかの参加者にメッセージを渡すシーンも。



## 7 > 共有会に向けたグループワーク

会場 —— F/T 椎名町オフィス

### 13:00 振り返りのワーク

#### <テンショングラフ>

これまでの6回の活動を通して、自分のテンションや感情を線グラフで振り返るワークを行った。発見を感じて嬉しくなった瞬間や、分かり合えなさから落ち込んだ瞬間など、他者から影響を受けて自身が変化していく様子を客観的に見つめる時間となった。

各自時間をかけてシートに記入をしたあと、2つのグループに分かれてグラフを発表した。

### 14:00 気になるテーマについて対話を深める

グループごとに、特に深めたいテーマを選び対話を深めた。

グループ①では、「なぜ対話をするとうれるのか?」という疑問から、「疲れることは悪いことなのか」「疲れることが必要なことなのか?」などといった方向に話が広がった。

グループ②では、観客と舞台の間にある「壁」が作品によって様々な形で取り扱われていたことに着目し、自分の経験を交えながらその違いについて考えを深めた。

### 15:00 問を深めるワーク

共有会を想定し、これまでの対話を「問」の形でまとめる作業を行った。

### 15:30 次回に向けた課題の共有

明日の共有会に向けて、各グループでもっと深めたい課題を明確化し、この日は終了となった。



## ⑧ > 共有会

会場 —— F/T 椎名町オフィス

ゲスト —— 長島 確、昨年のダイアログ・ネクスト参加者

### 10:00 共有会にむけて対話を進める

どのように自分たちの問を共有できるか対話を進めた。これまでにツールとして使用したレゴブロックや詩のテキストを使って、実際に身体を動かして準備を進めた。

### 12:00 お昼休憩・会場準備

### 13:00 開場

### 13:30 共有会

1グループ15分の間の共有の後、観客も含めて45分の対話を2回行った。

ゲストとして、ディレクターの長島確やF/Tスタッフ、これまでの講師、昨年の参加者などが集いにぎやかな会となった。

#### グループ①「分かれようとするとはどういうことですか？」

3人が同じ話題について同時にしゃべることによってカオスを生み出すミニパフォーマンスから共有をスタート。プログラムの中で分からないものに触れ「疲れた」経験から、分かれようとするものの難しさと複雑さについて考えた。グループに分かれた対話では、パフォーマンスを具体例に、分からせることのストレスについてや、理解が生まれるきっかけは何かという対話がなされた。

#### グループ②「演劇を通して知る、演劇の新たな価値」

演目によって観客とパフォーマンスの距離が異なり、それに対する観客の反応も様々であることを体験したことから、観客と舞台の間の「壁」をテーマに議論を進めた。信頼関係や親しみを築くことで新しい関係を作れるのではないか、という提案や、レゴブロックを使って理想観劇環境を表すなど、ビジュアルを使った共有も試した。グループでの対話では、各々の印象的な観劇体験や、観客の側からできる努力はなにかなど、広範囲に話題が及んだ。

### 14:45 共有会終了

### 15:30 「自己を見つめる」振り返りのワーク

#### <ギフトメッセージ>

各メンバーに対して、これまでの活動を振り返ってメッセージを送るワークを行った。

各メッセージの宛先は名前を記入せず、「あなた」で統一する。一通りメッセージを読み終えたあと、どれが自分宛のものか当てるミニゲームを行いながらメッセージの受け渡しが行われた。

自分がとらえている自己と、他者から見える自己とのギャップに改めて気づいたり、ほかの参加者の新たな自分の魅力を発見する機会となった。

### 17:00 解散

別れを惜しみつつ、全8回のプログラムは幕を閉じた。







# REPORT

プログラム終了後に寄せられた  
参加者からのレポートをご紹介します。



## 空気

I.T

ある『耐えがたい空気』がある。

本当は嫌だ、違うと感じているのにその意思を表せず、表さず、場のマジョリティな意見に同調していく空気。私は生まれてから今までのどこかの時点から、それを極端に嫌うようになった。

その空気は苦しい。私は同意できない事柄に対してうなずく度、自分で自分に嘘をついている感覚になる。今でこそ、「うなずかず反論すればいいじゃん」と言えるが、空気は嫌でも感じ取れてしまうものだし、なんといっても怖いのが、はみだすと何をされるかわからないという感覚。例えばはみだすことでいじめは起きるし、その他の者の同調によっていじめは成立する。

そういった場から少しでも逃れて『本心』を堂々と表せる場に身を置けないかと探ってきた結果、私は今、美術（芸術）の道に進んできている。気づけば周りでそういう空気を感じることは減ってきたが、近い価値観を持つ人が多いので、自然と他人の言動に違和感を覚えること自体も減り、反対に、ある狭い世界の中でしか行動していないという『もやもや』を感じるようになった。

今回、この「ダイアログ・ネクスト」への参加は、

思いがけずその『もやもや』にアプローチするきっかけになった。

同年代の参加者は皆それぞれ違った環境から、様々な興味でこの企画に参加してきているから、物事の捉え方や向き合い方などが全く違った。「ダイアログ・ネクスト」は、その人たちと毎回、何かについて「対話＝Dialogue」ができる場だった。

「対話」の場では基本、何を言っても許される。同意しなくてもいい。自分の意見を言う。分からなくてもいい。でも分かって、分かち合おうという努力はする。

そのような場を作って頂いたことで、遠い価値観を持つ者同士でも話し合える、理解し合える可能性があるのだと実感した。

「自分と遠い価値観を持つ相手」に心からの意見を言ったのは初めてだったように思うし、相手も（おそらく）『本心』だったから、私も異なる意見としてそのまま受け入れ理解することができた。

それはとても新鮮で清々しい体験だったが、同時に、今までそれを避けていたのかもしれないと、自分の弱さを突き付けられた。

これからは『耐えがたい空気』から逃れるだけでなくその『空気』を客観的に見つめ、どうしたらその『空気』を変えていけるのかを考えていきたいと思う。

## 楽しい苦勞を与えてくれたあなたへ

K. S

「これは大変かもしれない…どうしよう。」

最初の対話、「ファーム」の途中休憩に私が抱いたあなたへの率直な感想です。今まで、特に大学生活でぬるま湯につかり、のほほんと生きてきた私がこんなに頭を使ったことはおそらくなかったと思います。人の話を聴き、自分も考えて、伝える。一見単純なことがこんなにハードなのかと、ある意味新鮮な気持ちにもなりました。こうしてあなたはこの後も、私の思考をぐちゃぐちゃにし、私が整理している間にもまた新しい疑問を撒き散らしていく。自分の脳から溢れさせないように必死でした。実際には何回もキャパオーバーしてしまいましたが。

そして、あなたは私にたくさんのきっかけを与えてくれました。ある回の対話を終えた帰り道、あなたとは直接関係無いのですが、ずっと考えていたことに対して、突然突破口が見えた感覚になりました。霧が晴れるような、とよく例えられますが、本当にそんな感じで視界がパーっと開けたのです。私はあなたのお陰だと思わざるを得ません。あなたと向き合う度、私は自分の正直な気持ちを人に伝えることに、少しだけ臆せずいられるようになりました。あなたがなければ、こんなに素敵な感性を持った人たちとも出会うことができなかったでしょう。自分と向き合うこともできました。将来どうしたいか、どんな人になりたいか、そんなことも考えるように

なりました。これだけ私に大きな変化をもたらしたあなたの影響力ってやっぱりすごいなあと思います。あなたに鍛えられて得たこんなにたくさんの変化を鈍らせないように、さらに進化させていけたらいいな。

最後に、最終回に参加者の皆からももらったギフトメッセージがとても嬉しかったので、私もダイアログ・ネクストにギフトメッセージを書いてみました。とても長くて、でもあつという間だった1ヶ月には、これからの繋がるヒントのようなものがつまっている気がしています。まさにダイアログ・ネクストの名に相応しい、濃い1ヶ月を過ごすことができました。

## 「ダイアログ・ネクスト」に参加して

S.O

### 【プログラムについて】

どの回もそれぞれに作品鑑賞、主体としてパフォーマンスすること、対話、を通して自分の考えが拡張していったように感じて楽しかった。プログラムの構成が肌に合っていたとも思う。流れとしてスムーズで感情の起伏や学びが上手く消化できるようになっていった。

プログラム前半は、パフォーマンスを自分でやるのが新鮮だったし純粋に楽しかった。普段、人の目を気にしすぎる、緊張しい自分がなんの恥ずかしげもなくパフォーマンスし、その瞬間を楽しむということだけに集中していて、プログラムのスタートダッシュとして最適なコンテンツだったと思う。中盤は、日本以外の演出家の作品を鑑賞する機会には私にとっては貴重で文化的背景から現代の各地のアート事情まで興味関心が高まる内容だった。

今振り返り、特に自分にとって印象に残っているのは、時系列では後半の3回だった。『アートとは何か』を観るでも聞くでもなく自分で動きながら考えるアニコチェさんのワークショップ。とてもパワフルなアニコチェさんが伝えたかった事全てを受け止めきれないと思う。しかし、あの時間ある意味振り回されながら、社会とアートとそして自分について、正解を探そうと頭を堅くするのではなく自由に周囲と関わりながら考えることは面白かった。

オクイさんと滝さんのレクチャーパフォーマンス、お二人を交えた対話は言語の壁があり、上手く議論を進めることが出来なかったように感じたが、一方でメンバーとの対話は尽きることがなかった。それまでのどの公演の対話よりも考えが徐々に展開して、少しだけ納得がいくように言葉にして口から出せたように思う。

作品鑑賞最終回『オールウェイズ・カミングホーム』。原作を読んでおらず展開に追いつくのも難しかったが、演出家の方々のお話をお聞きすると演出や表現でぶつかったことが垣間見えたことが興味深かった。日本はまだこうしたアートを受け入れる土壌は少ないかも知れないが少しずつでも広げていければ人々のもの見方考え方に大きな影響を与えられるものだと感じた。

### 【まとめ～最後のリフレクションタイム～】

F/T参加前、芸術に触れる機会を増やすこと、アウトプットと

して言語化の練習をすること、が私の目的だった。初日から、自分以外の参加者は日常的に芸術について学ぶ又は実践する時間を持っているということが発覚し、なんて適当な理由で参加したものだ自分自身に呆れた。学年や専攻は様々で私が期待していたような環境ではあるなと思いつつ、F/Tというプログラムを通して自分を見つめることをゴールに置くことに違和感ももっていた。今だから正直に言うと、私は就職活動を終えていて、自己を見つめることについて折り合いはつけられているのであまりそのゴールに共感できなかった。自分のやりたいことのみを行う場として活用しようと、素直に受け入れられなかったのだ。

先に言及した目的についてより詳細に話をすると、日頃、思考が広く浅くに寄りがちなのがコンプレックスで語彙力を増やすだけでなく、表現力(?)を高めて、魅力的に伝えられる人になりたいと思っている。そこで、初めましての人ばかりのコミュニティで言語化の練習をしたいと思っていた。

過去にアートに関わる活動をするコミュニティで性にあわなかった経験があり、そのリベンジをしたいという気持ちもあった。F/Tは本当の意味での安全地帯で、結果的に本来の自分の目的に加え、自己を見つめる機会ともなった。そもそもアート自体が受動と能動を行き来するものであるもので必然でもあったかもしれないが、安心して過ごせたという意味ではコミュニティが上手く形成されていたおかげであると言える。

自己を見つめた結果を簡単に。自分は誰とでも話せるほうである一方で自分の殻に閉じこもりたい気持ちも持ち合わせている。その部分はバランスなので隠せるわけでも無くすわけにもいかない。しかし時にそういった周りにわかりやすく見えている感情の起伏が人を戸惑わせてしまうことがあることも認識して、何らかの手段で伝えることが重要であること。何らかの手段というと、言葉に限られるかと思うが、今回のプログラムでは“色”が共通言語になり得ることを知った、自分にとっては色への認識と二重に伝えることになるため、心地よくマッチしていたとは言いづらい。しかし、何らかの補助線を足すこと、相手との身近な共通言語、経験をきっかけにすると案外簡単にコミュニケーションに繋がっていくという発見もあった。こうしたF/Tを経て感じたこと、様々な発見は今後の私の人生に大いに生かせるものがあつたと考える。



## ダイアログ・ネクスト 振り返りレポート

E. K

演劇を観に行くことはできても、その後に自分の考えを整理して同じ演劇を観た人と共有する機会はなかなかないです。それに、我々観劇者が演出側の人に会うことは滅多にありません。ただ演劇を観ることにとどまらず、考察して他者と対話することによって思考が広がり、新たなインスピレーションを得ることができると思います。

ダイアログ・ネクストで演劇に関わる色々な方と出会い、観劇した内容をお互い共有して、さらにその中でできた疑問点を直接、演出する方々に話を聞ける貴重な機会を得ることができました。

ファームをみて、命のありかたを再考することができました。主人公オレンジは生きていた。彼が死を予感し、最後に見せたものが私には何よりもオレンジが生命体であることを証明しているように見えました。

『オールウェイズ・カミングホーム』で一人の少女が二つの部族の間で自分の居場所を探してゆく過程をみながら、知らずと韓国と日本の間で葛藤してきた自分の姿も見えてきました。このような葛藤は私のような二つのアイデンティティーがあることで発生するものだと考えがちです。しかし、このようなケース以外にも作中に少女が何度か名前を変えるところがあるように、私たちみんな自分の中にある色々な性質を持つ自分があるため、誰も

が本当の自分とは誰だろうかと迷うことがあると思います。迷いは誰にでもあり、自分の中の様々な人格の全てが自分であることを認識することが大切だと考えるようになりました。

長期にわたってのワークショップに参加するのは今回が初めてでしたが、主観を持って思考するトレーニングとなり大学の授業などの場面でも自分の考えを整理して疑問を持ち、質問することに抵抗感が減りました。また、色々な貴重な出会いもあり、お互いの考えを対話によって探求することができ、とても有意義な時間でした。

## ダイアログ・ネクストを終えて

A.K

ダイアログ・ネクストというプログラムを経験して、同じ作品を見て、各自あまりに異なるカラーや印象を持つことに驚きました。また、その中で同じ考え方や似た考え方を発見できるときもあり、なぜ似たのだろうと対話をしてみると、同じような作品を見ていたり、好きな本が一緒であったり、日頃のニュースや話題の中で共感することがあったりと、話してみないとわからない相手の価値観もあると思いました。参加者についてあまり知らないという状況が、実はそれぞれの素直な考えをすんなり言えることにも繋がっていたのかなと思います。

話が変わりますが、つい先日、お手伝いに行った現場でかっきーに会いました。元気そうな笑顔を見て、同じ作品を見ているのだからあとで対話したいなと感じました。笑

また、別日にはいずみちゃんとアナと一緒に韓国料理を食べに行きました。プログラムが終わってから何をしていたか、学校での生活、プライベートなこと、たまにまじめな話をしてダイアログだね！と笑いあったことはとても新鮮で楽しい時間でした。

一つの作品を通して空間を共有したあと、ご飯などに行って相手のプライベートな部分を知るというのは、私の普段のコミュニケーションとは全く順番が異なります。そのギャップの面白さで相手をよ

り知りたい、自分のことも知ってほしいと思う好奇心がさらに湧きました。他の参加者の子や見守ってくださっていたみさこさん、みんみんさん、神永さん、岡崎さんにも久しぶりに会いたいです。そして、このプログラムでの出会いはこれからも大切にして行ければ良いなと思っています。

学生向けのプログラムでしたが、もう社会人になってしまうので、社会人向けのプログラムも出してもらえたら参加したいなあとこっそり思っています。

## 「ダイアログ・ネクスト」を振り返って

M.M

私は幼いころから演劇を通して人とコミュニケーションをしてきた。それは大学生になった今も変わらず続けている。「『演劇』は大きな力を持っている。」今回のダイアログ・ネクストに参加して改めてそれを感じた。上演後、演じる側・観劇する側の壁（ここでは客席と舞台との距離を「壁」と表現する。）を無くし対話することで面白いことに、観劇した作品の新たな発見は勿論、今回「ダイアログ・ネクスト」に参加している仲間のバックグラウンドが見え、その人の新たな一面を知ることが出来た。そして仲間たちと対話していくうちに、演劇についての疑問や演劇の持つ可能性、未来について議論した。

私たちが目を付けたのは舞台と客席の間にある「壁」だ。演劇用語では、「第4の壁」と表される。「壁」が表す例として、コールアンドレスポンス、客席の高さ、客席との距離、演者の目線などが挙げられる。壁が大きい方が安心する人、ない方がワクワクした気持ちで観劇する人など「壁」に対する個人の印象は様々だった。

しかし、作品側が持っている「壁」は勿論だが、観客側の我々が作品に対して持っている壁もあるのではないかと。そして、その「壁」を良い塩梅にするにはどうしたらよいかを話し合った。良い塩梅

にするには作品に対して「信頼」や「安心」が必要だ。人は信頼出来たり安心する場所に自ら「壁」を建設することはない。よく聞く例でいうと作品上演後のアフタートークがある。しかし、アフタートークはあくまで上演後の話である。アフタートークのほかに挙げるとしたら公開稽古だ。公開稽古は作品を上演する前なので作品の完成する過程を見ることが出来る。途中の過程を見ることで、その作品に携わったような特別感を感じる人もいるのだ。

観客側が「壁」について考えることは勿論、普段携わることのない作品側から「壁」について考えたことは私にとってとても刺激的だった。

## 正解がない面白さ

H.K

これまでは舞台を見ることはあっても人と感想を共有することがなかった。このダイアログ・ネクストに参加して、正解がない中で意見を言い合い、新たな視点を得ることの楽しさを知ることができた。そのことは私自身の舞台芸術や対話への考え方にも大きな変化をもたらした。

舞台芸術で活躍している方たちとの対談は、自分の世界を広げる体験となり面白かった。対談で舞台鑑賞後に受けた感想を伝えると、演出家の方が意図していることと異なっていたり、気が付かなかった発見があった。

印象に残っているのは、ダンスのパフォーマンスを鑑賞後の対談で、踊りの表現について様々な考え方があったことだ。ある動きから連想したものがこんなにも違うのかと驚いた。自分にはない発想を聞くのは新鮮で、考えを共有することの面白さを実感できた時間だった。ある演出家の方からは、どんな感想や考えを持ったとしても、どれも間違いではないと言われたことがあった。この言葉は自分の思いを素直に伝えることの自信に繋がった。

人と共有することを前提に舞台を鑑賞すると、その舞台が表現している意味や意図の正解を見つけようとしてしまう。だが、それではいけないと思うようになった。正解のないものを探ることが対話で

あり、そのために共有する時間があるのだと実感したからだ。同じ舞台を見ても、何を感じたかは人それぞれ違うというあたりまえのことを改めて強く感じる体験となった。

これまで見たことのない舞台芸術の世界をしれたことも魅力的だった。どの作品も創り手の社会問題に対する強い思いを感じることができた。国や文化の違い、女性としての生き方など、もっと知りたいという思いが出てきた。

今回の参加メンバーと出会えたことも嬉しく思う。それぞれが思ったことを素直に伝えることで、その人が普段どんなことに関心があるのか、どんな視点を持っているのか知ることができた。そこからまた、対話が生まれたり、その人自身についても興味を持つことができた。

この体験を通じて、人と違う考えを持ったということや、何を大事にすべきだと思えるようになった。自分が感じたものが全てで、そこには正解がないということも改めて気づかされた。だからこそ共有することのできる対話の時間をこれからも続けていきたいと思う。





## フェスティバル/トーキョー 19

主催 フェスティバル/トーキョー実行委員会

豊島区/公益財団法人としま未来文化財団/ NPO 法人アートネットワーク・ジャパン、  
東京芸術祭実行委員会(豊島区、公益財団法人としま未来文化財団、フェスティバル/トーキョー実行委員会、  
公益財団法人東京都歴史文化財団(東京芸術劇場・アーツカウンシル東京))

協賛 アサヒグループホールディングス株式会社、株式会社資生堂

令和元年度 文化庁 国際文化芸術発信拠点形成事業(豊島区国際アート・カルチャー都市推進事業)



フェスティバル/トーキョー 19は東京芸術祭2019の一環として開催しました。

フェスティバル/トーキョー 19 東アジア文化都市2019 豊島と連携して開催しました。



公益財団法人  
としま未来文化財団  
Toshima Mirai Cultural Foundation

ANJ Arts Network Japan

NPO 法人 アートネットワーク・ジャパン

東京芸術劇場  
Tokyo Metropolitan Theatre

ARTS COUNCIL TOKYO



発行・編集：フェスティバル/トーキョー実行委員会

デザイン：阿部太一 [TAICHI ABE DESIGN INC.]

発行日：2020年3月31日

禁・無断転載

© フェスティバル/トーキョー実行委員会

【本書に関するお問合せ】

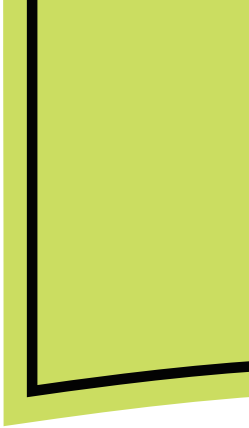
フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局

〒171-0031 東京都豊島区目白5-24-12 旧真和中学校4F

TEL: 03-5961-5202 FAX: 03-5961-5207

MAIL: [toiawase@festival-tokyo.jp](mailto:toiawase@festival-tokyo.jp)

HP: <https://www.festival-tokyo.jp>



<https://www.festival-tokyo.jp>

